2023年6月4日 佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書3章1～12節

説教題：良い実を結ぶために

星野富弘さんの本の中に、身体が動かなくなった星野さんが口にペンを銜えて字を書く練習をするために書き写ししていたある本の一節が掲載されていました。大変良い文章ですので、ご紹介したいと思いました。

「ヘレン・ケラー―(三重苦の聖女)―は、耳も聞こえず、目も見えず、暗黙と沈黙の中でその生涯を始めた。彼女はその幼児期を回顧して、『暗黙の中にも自分を受け入れる柔らかな膝があり、抱く手があり、口にふくませられる乳房があり、自分を愛する誰かがいることは分かるが、1つの耐え難い不満は、なぜその者が自分を示さず、また語ってくれないか、ということであった』と言っている。親としては、生み落としたただ1人の愛児、世にも哀れな子に、どれだけ自分を示したかったであろう。どれだけ語りかけたかったであろう。神は無限の愛を持って、私達をも愛しておられる。ところが、その愛を感じない無感覚状態に私達がある時、その愛の御心はどれだけ痛むことであろう。私達は石ころのように無感覚な者であった。ただ世を愛し、楽しみを愛し、自分を愛して、その奴隷として世を過ごした者。神への愛など露ほども持ち合わせなかった者である。神がまず私達を愛してくださったからこそ、そこに救いがある。『あながたが私を選んだのではない。私があなたがたを選んだのです』(ヨハネ 15:16)。罪人でない者がどこにいるだろうか。人は眠っている罪人か、めざめた罪人かのどちらかである。自分は罪人であると悟っている者よりも、罪はないとうぬぼれ他人を卑しめる者は、さらに大きな罪人である。『罪人の友である主イエス』こそ滅びゆく人類のただ1つの望みである」。「『神の愛』と『それを意識出来ない人間の現実、人間の罪』、それでも『なお注がれる神の愛』」、そのようなものを良く表現している文章だと思いました。今日のメッセージは、この文章を念頭に聞いて頂けると、良いのではないかと思います。

前回の箇所で、イエス様はエジプトから帰還されて、ガリラヤのナザレに住むことになりました。その後は、ナザレの村で「大工ヨセフの子」として育てられました。伝承によれば、ヨセフは早く死んだので、長男としてのイエス様はヨセフに代わって家系を支えなければならなかったようです。しかし30歳になられた頃、イエスは突然ユダヤの荒野に姿を現して、洗礼を受けて、「伝道の公生涯」に入られます。イエス様に洗礼を授ける人物こそが、バプテスマのヨハネという人です。今日はバプテスマのヨハネの活動を中心に信仰の学びをして行きます。

バプテスマのヨハネとは、どういう人物だったのか。ヨハネは、当時大きな評判を呼んだ「信仰覚醒運動」を展開した人です。4節「このヨハネは、らくだの毛の着物を着、腰には皮の帯を締め、その食べ物はいなごと野蜜であった」(4)。このスタイルは「旧約」の預言者エリヤと同じ格好です。「旧約」の最後の預言書「マラキ書4章5節」に「見よ、わたしは、大いなる恐るべき主の日が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす」(マラキ 4:5)という預言があります。その意味で彼は「主の日の前に登場する預言者エリヤ」として活動しました。また「主の先駆け」としての意識も持っていたでしょう。いずれにしてもヨハネがここで「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(3:2)と語っているように、彼は「天の御国が近づいたこと」、それはつまり「神の支配が近づいた、神から送られる王が来られて、世を裁き、世を治める時が来た」ということを示されて、自ら「預言者、エリヤ、主(王)の先駆け」として活動を始めたのだと思います。

彼は何をやったのか。彼は人々に「悔い改め」を説きました。そして「罪の告白」をした人に洗礼を授けました。当時、「洗礼」は、異邦人がユダヤ教に改宗する時に受けました。ユダヤ人は「自分達はもともと『神の民』だから―(聖いから)―洗礼を受ける必要はない」と考えていました。しかしヨハネは、ユダヤ人に「悔い改め」を迫りました。それは「神の民だ」と自認しているユダヤ人に、その「神の民だ」と自認しているところに問題を感じたからでしょう。ユダヤ

人の問題とは何だったのでしょうか。
ヨハネの許には、パリサイ人やサドカイ人と言った宗教指導者までやって来ます。(彼らが、本当にヨハネの呼びかけに応じて、悔い改めてバプテスマを受けようとしたのか、あるいは様子を観察に来たのか、それははっきり分かりません)。パリサイ人というのは、皆が不信仰になって行く時代の中で「神を信じて生きて行こう」と語った人達です。ある意味で「悔い改め」を知っていた人達です。でもその彼らに、ヨハネは語るのです。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい」(3:7～9)。「悔い改めにふさわしい実を結べ」、逆に言うと「実を結ぶような悔い改めをせよ」と言ったのです。「あなた方は『悔い改め』を知っているかも知れないが、それは真の『悔い改め』になっていない。だから実を結べないのだ」と言ったのです。
「悔い改め」とは何なのか。なぜ彼らの「悔い改め」は実を結ばないのか。聖書が教える「悔い改め」とは、「何か間違いを犯したから後悔する」ということではないのです。問題は１つ１つの表に出る事柄ではない。そのようなものを生み出す(いわば)「心の一番深いところになる心根—(心の向き)」が問題なのです。心根が間違っていたら—(言葉を変えると信仰が間違っていたら)—良い実は結べないのです。(新興宗教が色々な問題を引き起こします。あれは信仰が間違っているからです)。「悔い改め」とは、その「心根—(心の深いところにある心の向き)」を変えることです。ある人は「つまみ洗い」ではなく「丸洗いをすることだ」と表現しました。
では、パリサイ人やサドカイ人の「心の深いところにあった思い」とは何なのか。それはヨハネが「『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない」(9)と言っているように「私達の先祖はアブラハムだ、私達はアブラハムの子孫だ」ということだったのです。どういうことかというと、アブラハムは「信仰の父」と呼ばれる人です。実際に素晴らしい信仰に生きた人です。だから「それほどアブラハムの信仰の徳が深いから、アブラハムの子孫はアブラハムの徳を幾ら使っても使い尽くすことは出来ない」と考えていたのです。彼らは天国(来るべき世)を信じていました。そこに入り、生きることを熱望していました。しかし「神の裁き」も信じていました。しかし彼らによれば、「神に裁かれて地獄に行くことになっても、地獄の門まで行くと、アブラハムが地獄の門に待っていて、そこでユダヤ人なら天国に送り返してくれる」、そう考えていたのです。そうすると、どうせアブラハムが助けてくれるのだから、「神の前に自分の本当の姿—(真実の在り様)—を問う」思いはなくなるでしょう。
しかしヨハネは言った。「一方に『私はユダヤ人だ、アブラハムの子孫だ』という思いを持って悔い改めをしているからダメなのだ」。実際、なぜユダヤ全土から大勢の人々がヨハネのところにやって来たのかというと、申し上げたように、ユダヤ人は「やがて主の日—(主の裁きの日)—が来る」という思想も持っていました。そして荒野に預言者が現れて「主が世を裁く時—(世を支配する時)—が近づいた」と言った。そのことを本当に深刻に受け止めた人々は、「もし『神の裁き』があるとすれば、今の自分の状態ではその裁きに耐えられない」と思ったのではないでしょうか。「アブラハムの子孫だ」等ということではどうにもならない「自分の生き方の中にある罪」の現実を感じたのではないでしょうか。だから「天国—(来るべき世)—に入って行きたいのだ、そのためには、どうすれば良いのか」、その導きを求めてヨハネのところにやって来たのだと思うのです。
それに対するヨハネのメッセージは何だったのか。彼は言いました。「『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない…神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです」(9)。何を言っているのか。もちろんアブラハムは素晴らしい信仰に生きた人です。ある神学者は言いました。「『モーセ五書』—(色々な律法が 613 も書いてある『モーセ五書』)—のテーマは、『アルバハムの信仰のようであれ』ということだ」(J.セイルハマー)。それほど素晴らしい信仰者でした。しかし、アブラハムがもともと立派な信仰を持っていたから、神はアブラハムを選ばれたわけではないでしょう。神は、ご自分の自由な

意思によってアブラハムを選ばれ、自由な意思によってその子孫であるユダヤ人を神の民として選ばれたのです。ユダヤ人が神の民として選ばれるにおいて、ユダヤ人に何かの功徳があったわけではないのです。だから神は、為さろうと思えば、パリサイ人達が「何の価値もない石ころのような者」として軽蔑していた人々からでも、真に悔い改める人を起こして、その人々を救うことがお出来になるのです。であれば、アブラハムの子孫とされている彼らの持つべき心根は何だったのか。それは、ただ「選ばれたことへの感謝」です。何の功徳もない自分達が、神の民として、神に守られここまで歩んで来られ、今も、神に希望を置いて生きて行ける、そのことに対する心からの感謝ではないでしょうか。

最近出た「百万人の福音」のテーマは「ありのままで愛されているから、ありのままではいられない」というものでした。神様にただ選ばれて、神の民にして頂いている、そのことを本当に感謝して生きて行く時、その生き方は、自ずと神への態度、隣人への態度、生き方として表れて来るのではないでしょうか。その意味で、ヨハネは「悔い改めにふさわしい実を結びなさい」(8)と言ったのではないでしょうか。

ヨハネは、ある意味で「旧約」の時代を生きた人です。しかしイエス様が伝道の生涯に入られた時の第一声も—(「マルコ福音書」によれば)—「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ 1:15)という言葉でした。イエスも「悔い改めなさい—(自分の真実の姿を見つめて、罪を認め、心の向きを変えなさい)」と言われたのです。その意味でヨハネのメッセージは、私達へのメッセージでもあると思います。私達は「私にはアブラハムがいる…」というような思いは持たないでしょう。でも、その代わりに私達が誤魔化してしまうのは…。日本は「どこまでも人間中心の考え方」を持っている文化だと言われます。何でも人が基準です。何でも人と比べる。しかし人と比べると、自分のことを「罪人だ」とはあんまり思わないのではないでしょうか。「世の中には酷い人は沢山いるじゃないか。私なんかはまだ良い方—(善人の部類)—ではないか」ということになるような気がするのです。クリスチャンでもそうかも知れません。

でも、人は関係ない。人生の裁きも、人生の祝福も、私と神様との関係ですから。「私が神様の前にどうか」ということが問題なのです。しかし、私達の真実の姿はどうでしょうか。星野富弘さんがこんな詩を作っています。「飾りのない正直な文章でなければならないが、胸のなかのものをそのままさらけ出してならべるとなると、読んだ人が吐き気をもよおすほど、私の心はみにくくきたない」(星野富弘)。私達も思い当たるのではないでしょうか。私達の心の中にあるものを、このスクリーンに映し出すとしたら、どうでしょうか。恥ずかしくて立っていられないのではないでしょうか。しかし神様は、それをご存じなのです。知っておられるのです。その神様の前に、私達は 1 人で立つのです。使徒パウロは、後にコリント教会の人々にこう書き送りました。「わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです」(2 コリント 5:10)。

私達も、真の悔い改めが必要です。悔い改めの実を結ぶことが必要ではないでしょうか。でも「悔い改める」と言っても、どうすればよいでしょうか。もちろん、示される罪があれば、そこから方向転換をすることも大切です。しかし、それは何か「つまみ洗い」のような気がするのです。大事なことは、私達も、ユダヤの人達と同じではないでしょうか。

最初にご紹介した詩にこんな言葉がありました。「私達は石ころのように無感覚な者であった。ただ世を愛し、楽しみを愛し、自分を愛して、その奴隷として世を過ごした者。神への愛など露ほども持ち合わせなかった者である。神がまず私達を愛してくださったからこそ、そこに救いがある。『あなたがたが私を選んだのではない。私があなたがたを選んだのです』(ヨハネ 15:16)」。私達も、神の恵みと憐れみによって、自由に選んで頂いた者です。自分が神を信じるようにして頂いたことにおいて、私達には、何の功徳もなかったはずです。なぜ私を選んで下さったのか、私達には不思議ですが、でも選んで下さったのです。そのことを、とにかく神に感謝すること。そして、ここまで導いて来て下さったことを感謝すること、そこから私達の悔い改めの実は、始

まるのではないでしょうか。「百万人の福音」に星野富弘さんがこんな文章を書いておられます。「キリスト教の信仰を持ってからは…『こういう自分でも生きていていいんだな。生きて立派なことをする、いい仕事をする、そういうことは人間にとっていちばん大切なことではなくて、とにかくこの世に生を受けて生き続ける、それを神様に感謝して生きる、そのことが非常に大事なことなんだ。生きていること自体が、不思議で有り難いことなんだから』と思えるようになりました」(星野富弘)。ある研究者が言いました。「言葉は人である」。星野さんの紡ぎだす詩、彼らの生き方、そのベースは、神様への感謝から出ているのではないかという気が、私はしています。

私達の心が「こんな者が神様に選んで頂いた、頂いている」。そのことを生きる価値の中心に据える時、私達の心根は、そこから出る言動は、生き方は、自ずと変わって来るのではないでしょうか。しかも、私達にはさらに感謝があります。それは、「ヨハネのあとから来られた方」は、ヨハネが考えていたような「実を結ばない者は焼き払う」ような方ではなかったのです。神様が選んで下さったにも拘わらず、神様の愛に対して不十分な、欠けのある生き方しか出来ない、そんな私達のために、私達の知らない内に、十字架に掛かって下さった方なのです。その十字架によって、さらに私達は、神の子にして頂いたのです。これも、私達が何かをしたわけではない。私は自分の歩いて来た道を思うと、そして自分の醜さや弱さを思うと、自分が今、神様を喜ぶ者として生きることが出来ることを本当に有り難く思います。ただ恵みです。その恵みを思う時、私達は感謝して生きるしかないのではないかと思うのです。そして、感謝するからこそ、真剣に悔い改める、感謝するからこそ神に喜ばれるように生きようとする、そうやって私達も「悔い改めにふさわしい実を結びなさい」(8)というヨハネのメッセージを受け止めることが出来るのではないでしょうか。

何度もご紹介しますが、カナダで出会った高齢の兄弟は良く言われました、「私はキリストに愛された、だからその愛された愛で誰かを愛し返す、それが私の信仰です」。キリスト教と言うのは、裁きに対する恐れからではない、神の選びに対する感謝から、イエス様の十字架に対する感謝から、「悔い改めの実」を実らせて行くものではないでしょうか。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです」(ヨハネ15:16)。この言葉を、心に刻みたいと思います。